

町と遊ぶ ～点在する特徴を引き立たせた遊び空間のある町の提案～

15. 作品— 99. その他
公園 遊び空間 子供
水路 町の意外性

1140049 金平佳子
指導教員 渡辺菊真

1. 背景と目的

幼い頃の私は幼稚園、小学校から帰るとよく公園に遊びに行っていた。公園に行くとき友達や誰かは来ていて、また学年の違う子や公園で出会った子とも遊んでいた。公園は私にとって当たり前にある遊び空間であり、子供たちの集まる空間であった。しかし最近ではそんな公園という空間で遊ぶ子供の姿を見ることが減り、また土地が余ったから造られたような意味のない公園を見ることが増えたように感じている。

「公園に子供が集まらず、使われていない。」

そのような現状に衝撃を受け、子供の集まる公園を造りたいと考えた。しかし広さのある土地に遊具を置き砂場を造る、といった「普通の公園」のカタチでは現状との変化のないものが出来てしまい、「子供の集まらない公園」の改善にはならない。町の中には、住民ですら気づいていないような特徴がいくつも転がっている。そんな特徴を基に公園を造るとするならば、それはその土地ならではのものとなり、「普通の公園」とは違った町の要素が詰め込まれた公園のカタチとなるはずである。本設計では、土地の特徴が遊び空間となるように一工夫を加え、町のポテンシャルを引き出す新たな公園のカタチの提案をしていく。

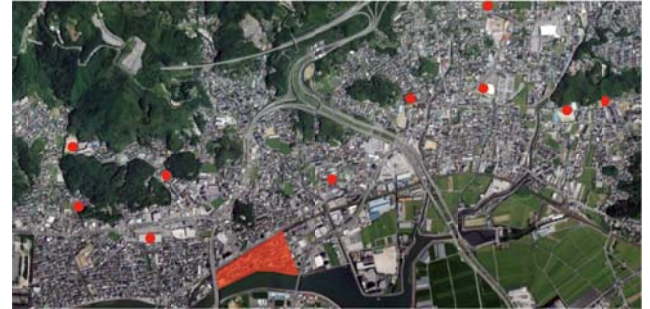
2. 敷地

高知市薊野南町に敷地を決定した。薊野地区は高知市中心街から離れて位置し、都市間の境界のような場所となっている。それにより様々な形が混在し、特徴的な空間を生み出している土地である。南町には、まるで水路の中を歩いているように感じる道や丸い穴模様のある斜面といった特徴的空間が存在する。

南町の特徴として水路がよく通っていることが挙げられ、北と南にはそれぞれ1本の水路が通っている。また南町の北に位置する中町や西に位置する西町と違い、JR土讃線の線路が通ることによって周囲の地域から空間的に切り離されていることも大きな特徴だ。そして切り離されていることで住民以外の南町への出入りはほとんどなく、物寂しい雰囲気を感じられる。

南町の周囲約2kmの範囲には保育園、幼稚園、小学校

が10か所あり子供の多い地域と考えられる。しかし周辺地域も含め公園の数が少なく、子供たちは住宅前の狭い道路や駐車場で遊んでいるのが現状だ。



薊野南町の航空写真

3. 設計

3-1. 方針

意外性ある空間を活かした遊び場を公園として考えると新しい可能性が拓けると思われる。そこで薊野南町に点在する特徴を基に、点在する遊び空間の提案をする。

3-2. 点在する空間の提案

3-2-1. 水路のような道 → 水と歩く道



左右を背の高い人工地盤上に建つ住宅に囲まれている道がある。左右に建つ全ての住宅が道に対して背面を向けており、敷地内の道の中でもここは特に異空間のようである。道の地盤高さが低くなっていることから道全体が影に包まれ、影の中という涼しさも相まってまるで水路の中を歩いているように感じられる。この道の水路感を引き立たせるため道の一端に通っている水路幅を大きくし、またもう一端には新たな水路を通す。夏には水をかけ合う等して遊べるだろう。

3-2-2. 水路に寄り添う斜面 → 丸花壇と穴梯子



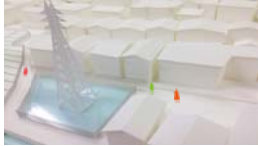
敷地南側を通る水路に寄り添うようにある斜面には丸い穴が開いており、その丸穴部分を使って花壇または水路に下りた

Play with the town

~Suggestion of the town with the play space that let a characteristic to be dotted with become more attractive~

めの梯子替わりにすることにした。好きな花を植えて楽しみ、住民の手で花壇を豊かなものにしていく。また斜面高さによって見下ろすだけであった水路に下りることができるようになり、子供たちにとって水路という遊び場が新たに加わる。

3-2-3. そびえ立つ鉄塔 → 水上のエッフェル塔



南町には推定高さ約 20m の鉄塔がそびえ立っている。立ち並ぶ住宅群を遥かに凌ぐ大きさは圧巻だ。そんな鉄塔は、四方を十分すぎるほどの広さを持ったフェンスに囲まれた状態で建っている。その広さの部分に水を張り、鏡のように鉄塔が映るようにすることで無機質であった鉄塔周りの印象が大きく変わるだろう。

3-2-4. 無機質な駐車場 → 芝木の車置き場



敷地内にある駐車場はコンクリート地盤または砂利が敷き詰められたものばかりである。どの駐車場も自動車を停めることだけを考えられたもので、無機質に感じられる。駐車場に描かれている白線は芝へ替え、縁石は枕木へ替える。芝を用いることで駐車場に自然の要素が追加される。縁石の代わりとして枕木を用いたのは、敷地の北側を JR 土讃線の線路が通っており、薊野南町の要素としての存在を強く感じたからである。

3-2-5. 放置された空き地 → ひと時の寄り道



駐車場としても使用されず、放置された状態の空き地がある。ここは緑化を積極的に行い、ベンチを置く等していく。この空間は子供のためというよりも大人のための空間と言ってよい。南町は子供たちだけではなく、もちろん多くの大人たちも生活している。そんな大人のための空間としてこの場を造った。散歩途中の休憩や近所の人とのおしゃべり等、生活の中の一部として使ってもらいたい。

3-2-6. 廃屋となった鉄工所 → イベント工場



敷地南東の辺りに廃屋となった鉄工所がある。廃屋と言ってもそれほど古いものではなく、倒壊の心配はないと判断した。鉄工所はそのままの形で残し、半屋外空間の屋根として

生き返る。この場合はボール遊びや地域行事等、多くの人が集まる時に使用してほしい。

3-2-7. 水路同士をつなぐ不思議な穴 → 水路ワープ



子供ですら入れないような穴がある。おそらく水路同士を道路下で繋いでいるものだろう。この穴を使って遊ぶことはないが、水路の多いこの土地ならではの特徴だと感じた。足元にある穴なため大人は気づきにくいものだと思うが、この特徴の存在を強調するため、穴の周辺を花壇化し自然と目が向くようにした。

3-2-8. 忘れられたベンチ → 思い出されるベンチ



住居間の空間に、かつては使われていたのであろうベンチがある。植えられている植物はただそこにあるだけの存在となり、整備されている様子はない。しかしベンチがあるということは、人の来る空間であったという証だ。この空間を人の来るものへと再生させるため、ベンチや植物を整備していく。

4. 点在する遊び空間

公園として 1 か所にまとまった遊び空間を造るのではなく、元々敷地内に点在していた意外性のある特徴的空間を核にして遊び空間を点在させることにより、敷地全体が子供たちにとっての大きな遊び空間となっていく。南町の至る所で子供たちの楽しそうな様子が広がり、周囲の地域から切り離された物寂しい雰囲気のある南町全体の活性化にも繋がっていくだろう。そして活性化した町から新たに意外性のある空間が生まれるかもしれない。意外性が意外性を呼び、その土地だけが持つ楽しい空間が繋がっていくことを願う。

